

未婚の男性をどう支援したら？

①	「青年団」の再組織 若い頃に男女交流の機会がなくなっている。子ども会を卒業すれば学校生活が中心、地域の男女が交流する機会がない。以前の青年団はどうなったのか。今に合った新しい青年団を考えてもいい
②	地域行事や組織活動に青年男女も参加へ 小学生から町内会行事に参加するように、制度を変えていく。そこで男女の出会いが生まれる
③	子ども版の町内会づくり。そこで早々と「婚活」 昔は子どもだけの町内会組織があって、町内の問題解決に動いていた。子どもの手で主体的に集落の問題を考え、取り組んでいくことができれば、当然、婚活の問題もテーマに上るのではないか
④	家庭介護を支援する集落に 長男に嫁が来れば、介護の仕事が待ち構える。それでも嫁に来ようという女性は年々少なくなっている。嫁の介護を集落ぐるみで支えるようにならねば、独身男性に嫁が来る可能性は薄い
⑤	親元に通ってくる子どももバックアップ 一人暮らしの親のもとに、子どもが通ってきている。この実家を隣人たちが支えていくことも期待されている。「あんたの親は私たちが面倒みてるからね」とでも言われれば、故郷への愛着も生まれる。その中に「将来のお嫁さん」候補がいなくても限らない
⑥	「離婚して戻った娘」を温かく迎える態勢づくり 離婚して子連れで故郷へ戻ってくる「娘」がいる。問題は集落がこの女性を「出戻り娘」と白い目で見ることである。しかも仕事がない。家がないという問題もある。これらの問題を解消してあげれば、もっと戻ってくる。この「娘」と独身男性が結びつく可能性もないことはない
⑦	中高年以降の「合コン」をセット 中高年になっても、男女が交流できる機会をいろいろ設定するのだ。そうすれば結婚はできなくても、生涯にわたって女性との自由な交流が可能というだけでも救いにはなる

⑧	<p>「入籍」に縛られない「やわらかな夫婦」形態も</p> <p>一人暮らし高齢者(男性)のもとに女性が通ってきて面倒をみるケースが各地で見られる。妻の役を事実上担っているボランティア。結婚とか、入籍といったしきりに縛られることなく、「やわらかな夫婦」もありうる。そういうあり方を思い切って広げていく</p>
⑨	<p>独身男性向けにライフデザイン講座</p> <p>結婚の機会がないまま、あるいは結婚を選択しないままに老後を迎える男性が増えている。彼らにはさまざまな困難が待ち構えている。40、50代の頃から、自分は今後どんな人生を歩んでいくのか、歩んでいきたいのかをしっかりと考え、自分なりの人生設計をしていける講座を設ける</p>
⑩	<p>老後に備えた自立生活訓練も</p> <p>一人暮らし高齢者といっても、問題なのは主に男性の方である。周囲の人と交わることをせず引きこもる。助けを求めることができない。家事など生きていくのに必要な技術も欠いている。これらの問題を克服できるよう自立訓練を、今からやっておかねば</p>
⑪	<p>独身男性の自助グループ作りの支援</p> <p>一つの方法は、彼らで自助グループを作り、自分たちで老後の備えを共同でやっていくことである。人に訓練されるのは嫌だが、自分たちで自主講座を開くのなら問題ないのではないか。独身男性の会ができてもいい</p>
⑫	<p>「よそ者扱い30年」をもっと短縮すべし</p> <p>他地区から嫁いできた女性が、「この土地でよそ者扱いから解放されるのに30年かかる」と言っていた。これではとても嫁の来手がない。もっと短縮できないものか</p>
⑬	<p>嫁にも耐えられる畑仕事を</p> <p>都市部から嫁に来て畑仕事を何十年としている女性から意外な声が出された。「畑仕事って、意外と楽しいのよ。いくらでも休息が取れるし、その分好きなこともできる」。そんなベテランたちで、都市部の女性でも楽しく畑仕事ができる法を伝授してくれるといい</p>
⑭	<p>「縁結び屋さん」の再登場</p> <p>山口県萩市でマップづくりをしていたら、こうした人材にめぐり合った。その女性は(相当の高齢であったが)、「ほれ、こんな歌もあるだろ?」と言って、歌い始めた。「出しゃばりおヨネに手を引かれ、アイちゃんはタローの嫁になる」。昔は、1件結びつけてあげたら、双方から20万円いただけたと彼女は言っていた。相手を見つけてくれたのだから、20万円は安いものかもしれない</p>